

“結婚”と聞いただけで多くの若い女性は胸が高鳴り瞳を輝かせるのではないのでしょうか。まるで魔法の言葉ですよね。

昨今ではご自身の結婚を夢見るだけでなく、「幸せのお手伝いをしたいから」や「きれいなドレスやお花に囲まれた結婚式場で働きたい」といった理由でウエディングプランナーという職業を目指す人も増えていきます。

昔から“結婚”は女性にとつて憧れであり、その中でもっとも華やかな結婚式や披露宴を夢見る人が多いのですが、私はそこで「ちょっと待った!」と言いたいのであります。確かに彼にプロポーズされて一番に頭に浮かぶシーンは、プリンセスみたいなドレスを着てお父様とバージンロードを歩く姿だったり、牧師様の前で「はい、誓います」と言つて新郎にウエディングキスしてもらつたりしている姿でしょう。または華やかな会場で大勢のゲストに祝福され、ケーキ入刀をしたりファーストバイトをしたりしている姿でしょう。ですが、結婚式つてあくまでも「私たち、結婚しました。未熟な私たちをこれからどうぞよろしくお願いします」と

いうお披露目の場であって、そこがゴールではないのです。むしろスタート地点なのです。いきなり説教じみた物言いになってしまいました。そこが大事なのです。

自己紹介がてら、少し私のことについてお話ししますね。私は三十歳手前でウエディングプランナーになったので、今の業界からすると相当な遅咲きでした。その代わり大学や専門学校を卒業してすぐにプランナーになった方々より多少は社会経験もあり、特に若い新郎新婦には人生の先輩としてアドバイスさせていただく場面もありました。それに、このようなことを言うとうと希望に満ちてプランナーになった方々に大変申し訳ないのですが、私は望んでウエディングプランナーになったのではなく、勤めていた会社の人事異動でブライダル部門に配属され仕方なくプランナーになったのです（人事担当の方、ごめんなさい）。スタートがそのような感じだったので、ある意味冷めた状態で婚礼という世界を見ていました。かなり異色のプランナーだったと思います。

そんな私がその後、ブライダルの世界にどっぷりのめり込んでしまったのです。なんて素敵なお仕事なんだろう！と。ほとんどの方にとつて人生最高の瞬間。その場面に立ち会え、しかも私がそのプロデュースをするわけですから！そして関わっている誰もが幸せになれる場

面で仕事ができるって、そうそうあることではないですよ。さらに心の底から「ありがとう
ございました！ 担当してただけて本当によかった！」と感謝までしてもらえるわけですか
ら。ただし、先にも述べたように結婚に対してとても冷めていた私は新郎新婦に寄り添いつつ
も、時には厳しく「それって本当に必要なものですか？」とか「今一度ゲスト目線で考えてみ
ましようか」なんてことも進言していました。当時、多くの若手のプランナーは自分自身に置
き換えてお客様の婚礼をプロデュースするため、どうしても本人の目線で物事を見てしまいが
ちでした。つい自分に置き換えて考えてしまうのですね。夢見る夢子ちゃん状態です。しかし、
私の場合は余裕を持って全体を見渡すことができたので、いい意味でビジネスライクに対応す
ることができたのです。とにかくプランナーも含めてハイテンションになりがちな打ち合わせ
の場面で冷静に物事が見極められたことは、今思えば最適な人材だったのかもしれない。
ご本人のことであれ、仕事として考えている人であれ、結婚式というものの見方を少し変え
てみていただけたらな……という願いが、今回この本を書くきっかけとなりました。人の美し
さというものは、華やかな外見だけではないのです。内からにじみ出る優しさや思いやり、気
遣いこそが本物の「美」だと思っております。

結婚式に夢や希望をお持ちの皆さんに決して苦言を呈しているわけではありません。多くの

お世話になった方々を招く一世一代の晴れ舞台であるからこそ、「おもてなし」と「感謝の気持ち」をもって相手の方のことを一番に考えていただきたいと思うのです。

この本では親御様やプランナーが言いたくても言えないことをあえて申し上げます。それが後々皆さんのためになるならば本望です。読み進める中で、異を唱えなくなる箇所もあるかもしれませんが、最後まで読んでいただけたら幸いです。

なぜなら……こんな私ですが、誰よりも素敵な花嫁様になつていただきたいと願っているから。また、世界一の花嫁様にして差し上げることのできるプランナーを応援しているからです。

増田 美穂子